

あさご農業委員会だより

開発が進む夜久野高原

雨のため現地での取材が出来ず、市役所会議室で説明を受けました。

夜久野高原は、肥沃な畑が広がる地域ですが、農地が狭小、不整形で、農道も狭くて大型機械の導入ができません。その上、野菜作りに必要な用水もなく、経営規模の拡大が困難な状態でした。

このため、平成30年度から令和4年度（予定）にかけて、農地中間管理機構関連事業として、総事業費六億四千二百万円、区画整理や道路・水路の基盤整備を行っています。

この事業により、農作業の大型機械化や水管理の省力化を図るとともに、担い手である法人等に農地を集積して、野菜の生産拡大を行うことと継続的に安定した畑地農業経営が期待されます。



農地利用最適化推進委員

研修と情報交換の実施



研修会の様子

4月9日に、朝来市農業委員会では、農地利用最適化推進委員の活動内容の再確認を目的に研修会を開催しました。

今回の研修会は、講師が一方的に説明する形ではなく、情報交換の意味も含めて、少人数で発言しやすい座談会形式で行いました。

初めに石原会長から推進委員の制度等について説明があり、その後、二班に分かれて意見交換を行いました。

委員それぞれの活動内容や担当区域の課題のほか、農政全般の多岐にわたる活

発な意見が出ました。情報交換をする中で、推進委員のすべき仕事や今後の活動のヒント等が得られました。

ひょうご農林機構が発足

令和3年4月1日、公益社団法人 兵庫みどり公社と一般社団法人 兵庫県農業会議が組織統合し、新たに「公益社団法人 ひょうご農林機構」が発足しました。

人口減少や高齢化が進行し、地域農業の衰退、農村集落・農村社会の疲弊

発行

朝来市農業委員会
令和3年7月
Tel.079-672-2833
(直通)

が危惧されている中で、担い手を中心とした農業構造への転換と多様な主体による農村地域の保存・活用や地域の活動すべき農地を全体として有効活用することなどが益々重要になっていきます。これら農業・農村の課題解決をワンストップで推進するための体制を構築するために統合されました。

科学的有機栽培で

南但馬地域の強い農業をめざす

3月11日、ジュピターホールでリモート開催された農業講演会「南但馬地域の強い農業をめざす講演会」に参加しました。

「未来を創るBLOF理論」高品質・多収穫・高栄養価を実現する「く」をテーマに（一社）日本有機農業普及協会の小祝政明理事長がBLOF理論についてリモート講演されました。

BLOFとは、(Bio Logical Farming) バイオロジカルファームングの略で、科学的な有機栽培を実践し、有機栽培でも高品質で多収穫を実現でき、また病害虫に強いということが特徴というものでした。

農地法

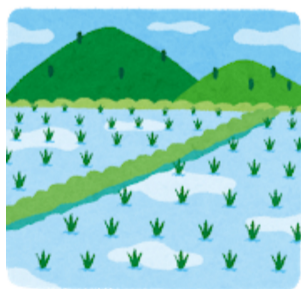
Q&Aシリーズ (16)

農地利用最適化推進委員にかかるQ&A

Q 農地利用最適化推進委員の役割はなんですか

A 主な役割は、担当区域において「農地の利用の最適化」、つまり、担い手への農地集積や遊休農地の発生防止・解消のための農地パトロール、新規参入の促進などの地域に密着した現場活動を、農業委員と連携して行うことです。

詳しくは農業委員会事務局にお問い合わせください。
【農業委員会事務局】Tel.079-672-2833



全国農業新聞特別賞を受賞

第27回「農業委員会だより」全国コンクールにおいて、朝来市農業委員会が発行する「あさご農業委員会だより」が兵庫県代表として推薦されていたところ、全国農業新聞特別賞を受賞しました。

昨年度の全国農業新聞賞に引き続き2年連続の受賞となりました。

編集に携わる広報研修委員9名は、これを励みに、より分かりやすく、親しみのある地域に密着した紙面づくりをこれからも心掛けていきます。

総会での審議件数

審議内容	4月	5月	6月	計
農地法第3条 農地の売買・貸借	2	2	5	9
農地法第4条 農地の自己転用				
農地法第5条 農地の転用売買・貸借	4	3	3	10
非農地証明申請	2			2
空き家に付随する農地の指定	1		1	2
農業経営基盤強化促進法による農地の貸借	7	5	1	13

全国農業新聞

NATIONAL AGRICULTURAL NEWS

週刊 月4回金曜日発行
月700円、年8,400円
(消費税込)

発行所 一般社団法人 全国農業会議所
〒102-0084
東京都千代田区二番町9-8 中央労働基準協会ビル
電話 03-6910-1130 FAX 03-3261-5132
ホームページ <http://www.nca.or.jp/shinbun>

購読の申込みは農業委員会事務局へお気軽に連絡ください。

認定農業者シリーズ13 特産物岩津ねぎ 3人のチームワークで挑戦



ハウスの中で 左から野崎さん、田中代表、津さん

今回は田植えシーズン真っ最中の忙しい中を、和田山町市御堂の(株)NOUEN代表の田中正広さん(57才)、従業員の野崎由美さん、津志歩さんを取材しました。

なぜ、朝来市で農業を？
もともと市御堂出身の田中さんは、岡山市で県や市からの仕事や企業からの仕事を請け負っている「(株)アントウ」というIT企業を経営されています。

経営内容は？
現在は水稲事業が9ha、岩津ねぎが2ha、岩津ねぎの苗が30a、玉ねぎの苗5aを栽培されています。岩津ねぎの耕作面積は朝来市内で一番です。



(株)NOUENの事務所にて

岩津ねぎの苗が2ha、岩津ねぎの苗が30a、玉ねぎの苗5aを栽培されています。岩津ねぎの耕作面積は朝来市内で一番です。

ターから全ての業務を担当されています。農繁期には本社からも社員の方が応援に来られます。
苦労していることは？
毎年天候が違うので、農業は毎年1年生です。

農業の楽しみは？
3人それぞれの思いがあるようで、従業員が喜んでくれるのが一番です。(田中代表)
お客様からのダイレクトな反応やバイヤーさんからの喜びの声が励みになります。(野崎さん)

今後の先、3人でやれることには限界がある、地域の方面がの生產品とコラボしたり、企業と連携して新たな加工品をつくってみたい。
本業が、イベント事業やプロモーション事業なので、営業担当が販売先を開拓し、東京の百貨店で兵庫県の特産物展を開催したり、若手農家の販売先を開拓する仕事もしています。



むすびの匠米と加工製品

コロナの影響で、関西の外食産業の取引先では、出荷が十分の一まで落ち込んでいますが、百貨店やスーパーの惣菜の需要が爆発的に伸びて、売り上げは順調です。

取材を終えて
今後、3人のチームワークで、岩津ねぎの可能性をこれまでに引き出し、楽しめたいと思っています。(山野)



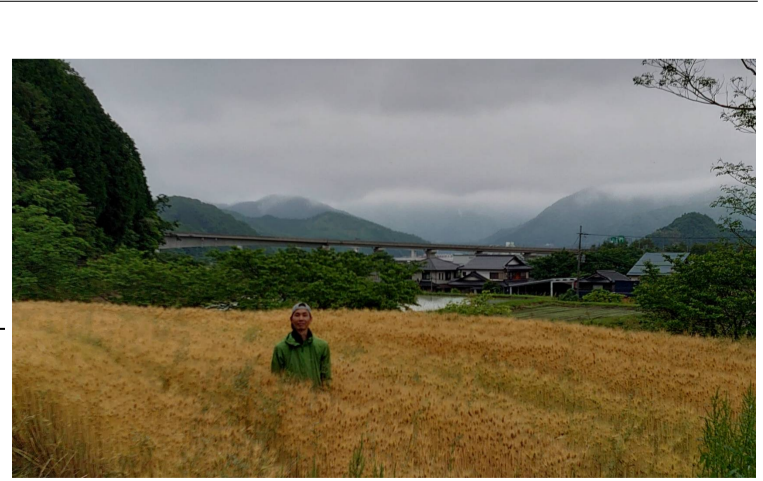
例年より早く梅雨入りした5月17日の午後、和田山町安井で無肥料・無農薬で農産物栽培をされている岡村康平さん(43才)を取材しました。

無肥料・無農薬で栽培農業者は全国でも1%に満たないそうです。

無肥料とは有機と呼ばれる肥料も使用せず自然の循環に任せ育てる。無農薬とは簡単に説明すると、肥料が過剰になると、栄養分が葉などから放出され、虫が寄ってくる。多くの無農薬農家の持論らしい。

無肥料・無農薬で栽培農業者は全国でも1%に満たないそうです。

無肥料とは有機と呼ばれる肥料も使用せず自然の循環に任せ育てる。無農薬とは簡単に説明すると、肥料が過剰になると、栄養分が葉などから放出され、虫が寄ってくる。多くの無農薬農家の持論らしい。



大麦畑に立つ岡村さん

二週間早い梅雨入りで苦労されている方も多いのでは。朝来市の特産物、岩津ねぎに取り組んでおられる田中さんの情熱には頭が下がりました。

私には「目からウロコ」的なところが多くありました。自然の持つ治癒力と自然に対する畏敬の念が自然栽培を成功させたのかもしれない。(西村)

編集後記